

【氏名】 李 里花

【所属大学院】（助成決定時）一橋大学大学院

【研究題目】 米国ハワイ州のコリアン移民を事例とする民族の集合的記憶

【研究の目的】

本研究は、米国ハワイ州のコリアン移民の移民百周年祭を事例に、民族の集合的記憶の形成をナショナリズム・グローバリゼーションとの関係から考察することを目的とする。特に、民族の集合的記憶がナショナルな枠組みに構造化されていく過程において、グローバリゼーションや祖国のナショナリズムがどう関係しているのかに注目し、現代の移民・民族のナショナリズムに関する考察を行うものである。

現在の移民・民族研究は、民族的枠組みの虚構性が強調される一方、それに対抗する形で、民族の文化的真性が強調される。これらの研究に対して、本研究は民族的カテゴリーの政治社会的虚構性を認めつつも、実際には民族的カテゴリーに範疇化されている現実を受け止め、民族の文化的真性がナショナルやグローバリゼーションといった枠組みとの関係の中で構築／再構築される歴史社会的プロセスを明らかにする調査研究の一貫として行った。

【研究の内容・方法】

本研究では、ハワイ・コリアン移民の歴史をめぐり、移民社会においてどのような語り形成され、その語り口がどのように変化してきたのかに注目することによって民族の集合的記憶を検討した。

ハワイ・コリアン移民社会の特徴は、移民時期が 20 世紀初頭と後半の異なる二つの時期に行われた点である。初期の移民は、サトウキビ農場に移民労働者として渡った人々(1903～1905 年)と、それら人々と結婚した「写真花嫁」である。そして後期の移民は、「ポスト 65 年移民」といわれるアメリカ移民法改正以後に大韓民国から「移民」として渡った人々(1965 年～現在)である。初期の移民は、移民後、出身国の植民地化により祖国独立運動を展開する一方で、ハワイの真珠湾攻撃後の戒厳令下、法的には「日本人」であることから「敵性外国人」として範疇化されるなど、出身国の状況によって移民社会の集合的記憶が大きく影響されてきた。しかし大韓民国出身の「ポスト 65 年移民」が流入する 1970 年代頃になると、初期移民と新着移民との間に「祖国」をめぐる集合的記憶の違いが移民社会で顕在化し、移民記念祭等の集団表象の場では歴史や祖国をめぐる語り口に「ズレ」が生じるようになった。そのため本研究では、ポスト 65 年移民が急増する 1970 年代以降に開催された移民記念祭(1978 年 75 周年、1993 年 90 周年、2003 年百周年)に注目し、移民記念祭を通して、どのような語り形成され、その背景にはどのような集団内の／をめぐり状況があったのかを検討した。

方法としては、2002年8月～2004年7月に行ったハワイ・コリアン移民の移民社会に関するフィールド調査を基盤に、2005年1月～2月に移民社会の集合的記憶をめぐる歴史的史料を収集し、移民百周年祭やその他関連行事の関係者へのインタビュー調査をハワイ・ホノルル市で実施した。

【結論・考察】

本研究の事例から、次の点が考察された。(1)ハワイ・コリアン移民の初期移民をめぐる語り「オリジナル移民」(1978年)、「名誉ある移民」(1993年)、「我々の祖先」・「パイオニア移民」(2003年)といった形で変化したが、その背景には、韓国のグローバリゼーション政策とハワイ州政府の観光政策の中で経済支援が行われたことにより語り口が変化した点。(2)しかし一方で、語り口は言語(韓国語と英語)で使い分けられ、韓国語では韓国ナショナリズムに方向付けられた語りが形成され、英語ではアメリカナショナリズムに方向付けられた語りが形成されていた点。すなわちハワイ・コリアン移民の百周年祭の事例から、民族の集合的記憶をめぐる語りの語り口は、移民出身国と受入国のグローバリゼーション政策によって変化がもたらされたことが明らかとなったが、しかし一方で、新たに形成された語り(二つの国家のグローバリゼーション政策が交錯する語り)は、言語(韓国語と英語)によって使い分けられ民族の集合的記憶が形づくられていることが考察された。

以上、本研究からは、出身国や移民先のグローバリゼーション政策によって、移民の語り「ナショナルな枠組み」に構造化されていく過程が浮かび上がり、さらにその「ナショナルな枠組み」は、グローバリゼーションの影響により、移民先だけではなく、出身国の語りにも一体化していく過程でもあることが考察された点で現代の移民・民族をめぐる新たな視角を投入したが、移民・民族の集合的記憶については、歴史的なプロセスやミクロな次元からの考察がさらに求められることを今後の研究課題として提示し、結論とする。